第4回 実践場面を科学する―こんな時どうする？Ⅰ
～独自の行動が多い～

講師　　岡村　由紀子　氏

1　ちょっと違う子どもの姿

2002 年頃から、以前とは違う気になる子どもの姿が見られるようになりました。例えば、食べ物の絵本を見て、「おいしそう」と食べる真似をする中、「これ紙だもん」と言う 2 歳児。「犬の絵を描いて」と言われて描くと、「〇〇犬はそうではない」と言う 3 歳児。服が濡れて着替える時、「フリルがついていない」と言ってずっと泣き続ける 4 歳児。わがままとも違います。最初は 30 年も保育をしているのに、私に理解力がないのだと思いました。しかし、周りでも「この子の気持ちがわからない」という声が多く聞かれるようになっていました。

そこで原点に戻り、子どもの目の動きの先を見てみると、子どもは興味・関心のあるところを見ています。0 歳、1 歳児は、よく真似をします。真似は発達の原動力ですから、遊びに参加していなくても見ていることが大事なのです。“心が躍動している”というのは、子どもを見ているとわかります。皆さんの保育実践の中にある感覚です。特にベテランの保育者は、「あの子、参加していないけれど見ているよね」「楽しがっているから、今に来るよ」と考えると思います。そのような感覚が、気になる子どもを通して、保育者のスキルを上げるチャンスになるということに気がつきました。子どもの表情、しぐさ、その時の状況や行為を見て指導していくことが大事だとわかってきました。

療育の必要な子どももいますが、多くの子は、仲間から離さず、園での楽しい遊びを保障する中で、育ちをきちんと見ていくことが大事ではないかと思っています。

2　保育の指導とは

保育の指導は、子どもが「自分でやってみたいという動機をつくる」ことです。遊びに夢中になる継続的要素を保育者がつくり出すことで、初めて子どもは主体的に遊びを楽しむことができるのです。

私の園では、来週運動会です。4 歳児のねらいは、「運動会に取り組む」であり、「運動会の渦をつくる」というのが今日のねらいです。5 歳児は自分たちで“運動会をやるぞ”という渦があるので、4 歳児はこの渦をもらいます。昨日の帰り、5 歳児から「足に三つ編みを巻くと、走るのが速くなる」と聞き、“三つ編みを作りたい”という気持ちで帰った 4 歳児がいました。

保育者はその子の分の三つ編みを作り、運動会のことは一切言わずに、翌日「〇〇ちゃん、作る？」と声をかけるところから保育が始まりました。

保育室には「運動会まであといくつ」という表があり、子どもは「あといくつ寝ると運動会だ」と言っていました。表を見ている子と、三つ編みを作っている子をつなぎ、“三つ編みを作りたい”という子を増やし、運動会にどう結び付けるか。

三つ編み作りは初めてなので、指導は一対一です。“作りたい”と言う子どもの名前をホワイトボードに書き、順番に取り組みます。子どもは名前を見ていましたが、名前を見ているだけでは盛り上がりません。私は子どもたちに「あなたは何番よ」と言いながら、三つ編みの布を渡しました。保育室では狭くなると考え、みんなでホールに移りました。三つ編みができた子が増え、まだ布を持っているだけの子どもが、「運動会」と言って一緒に走ったり、踊

ったりし始めました。帰りまでに23人の子どもがリストに名前を書き、6人以外が全員完成しました。

これは環境を作ったのです。子どもに“運動会をやろう”という気持ちがあり、保育者も「あと10個寝たら」という表を保育室に貼っています。三つ編みが完成するたびに、「○○ちゃんができました！」と声をかけました。明日6人の三つ編みもできたら、みんなで「忍者の運動会」に向かっていくと考えます。

「動機」と「継続」のための環境をつくる保育が大切です。中心は子どもが“やってみたい”という思いです。運動会の種目は、保育者と子どもの願いを合わせてつくっていきます。教育は指導があって初めて成り立ちます。放っておいたら教育とは言いません。一人の子どもの“やりたい”という思いを、どう周りに広げていくか。保育室、廊下、ホールに活動の場を広げるのは、物的環境を変えることです。

集団保育は、「一人の育ちが集団を高め、集団の育ちが一人を高める関係性」の中で保育をしています。一人に集中しているようで、実は全体の保育をしているのです。子どもはよく見ています。個への指導と、集団への指導の両方が必要です。

（1）　個への指導

ア　共感する

子どもの行為には意味があります。ですから、共感的にかかわることが大切で、次の指導の一手が見えやすくなります。

今朝、4歳児のクラスに行った時、Aちゃんが大泣きしていました。当番のグループを間違え、友達から指摘されたことがとっても悲しかったのです。私はAちゃんに「間違えちゃうこともあるよね」と言いましたが、それでもまだ泣いていました。だから、そこには泣いている意味があるのです。「どうしたのかな」「そうやって言われるのはいやだよね。なんか怒られちゃったような気分になったのかなあ」と言ったら、Aちゃんは初めて頷きました。「そういう気分になっちゃったことをみんなに伝えてみる？誰から言われちゃったの？」と聞くと、泣きやんで言えました。

言った子に「言われたことはわかったけれど、怒られちゃったと思ったみたいなんだよ」と伝えると、その子は「え、怒ってないよ」と言いました。私が「そう思っちゃったことはわかってくれるかな」と言うとその子は「うん」と言いました。そしてAちゃんに、「わかってくれたよ」と伝えました。

私がAちゃんに最初に言ったのは、「そういうこともあるよ」です。それでもすごい声で泣いていたので、理由はここではないと思いました。Aちゃんはしっかりしていて、人から言われたり失敗したりする経験がなかったのです。だから言われたことがとても悲しかった。人生にはそのようなことは山のようにあります。そのことをAちゃんが今ここで実感するには、「わかってくれたよ」「怒ってないよ」というやり取りが必要だと考えました。やり取りの後、Aちゃんは泣きやんで友達と遊び始めました。

昼食後、Aちゃんが私の背中に乗って、ぎゅっとやってきました。“今日、自分の気持ちをわかってくれた人だとAちゃんに認めてもらったのかな”と思えて、嬉しくなりました。心が通じ合う時というのは、“保育して良かった”と思えるものです。

イ　環境を作る

興味・関心が持てるように、環境を作ります。みんながままごとで遊んでいる中、積木を穴に落とすことが嬉しくて、それを繰り返し楽しんでいる5歳児のBちゃんがいました。この子は、これだけだとなかなか友達とつながりにくい。そこで保育者は、ままごとコーナーの入口に、Bちゃんの気に入っている段ボールを置きました。友達と入口を共有すると、ままごとで遊んでいる友達が見えます。だから「ごちそう食べる」と言ってBちゃんが時々そこか

ら出てくるようになりました。

つまり、物の環境をつくるというのはこういうことで、こうして子どもはつながっていくのです。

ウ　イメージを持ち難い場合

ごっこ遊びでは、保育者は、その子と集団のイメージをつなげる指導をしていきます。

３歳児のＣちゃん、Ｄちゃん、Ｅちゃんが砂場でクリームを作っていました。保育者は、バケツに土を入れてひっくり返し、「これをケーキにしよう」と言いました。すると３人は、「クリームだ」と言って、ケーキに自分のクリームを盛ります。しかしＦちゃんは、イメージが付いていきません。保育者が、「Ｆちゃん、そのクリームちょうだい」と言うと、「これクリームじゃないもん。お砂と水を入れてどろどろにしているんだよ」とＦちゃん。保育者は“ここで負けたらプロではない”と思い、「そのクリームみたいなどろどろをくれませんか」と言います。するとＦちゃんは「いいよ」と言って、ちょっとだけくれました。保育者は、ケーキに棒や花をつけました。Ｆちゃんはあまり興味はなさそうでしたが、ちらっと見ます。この「ちらっと見る」ことが１回でもあったら、次につながります。特に、イメージのない子の言葉に対して保育者がめげてしまったらプロではありません。その子の持っている現実的な認識と、うそっこを結びつけていくことが大事です。こういうことの繰り返しが大切なのです。

保育というのは、子どもの状況に合わせてクリエイティブに創るのです。決められたことをやるより、子どもと一緒に、子どもの反応を見ながら、自分たちのねらいも大事にして創り出すのが本来の使命です。活動を通して、子どもの中に何を育てているのかという土台を共通にして保育を創るのです。

エ　見えにくい要求語（表情・単語）

Ｇちゃんが、Ｈちゃんの唇をはさみで切りました。通常は不適切なことをした場合、「なんでそのようなことをしたの？」「どうしたかったの？」と聞き、「今度はこうすればよかったね」と伝えます。

この二人は、とても仲よく遊んでいました。私はＧちゃんに「どうして切っちゃったの？」と聞くと、「Ｈちゃんが紙を持ってきてくれなかった」と言います。紙を持ってきてほしかったことを伝えたか聞くと、「言っていない」と言います。Ｇちゃんは一緒に遊んでいて、当然Ｈちゃんが紙を持ってきてくれると思いこんでいたのです。でも持ってきてくれないから、はさみで切ったというのです。

病院から帰ってきたＨちゃんに確認をして、こういうことはいやなんだということを言わせました。そして、こういう時は、「〇〇ちゃん、紙を持ってきて」と言うことをＧちゃんにはっきり伝えました。

子どもたちが帰った後、職員で話し合いました。Ｈちゃんは１週間、昼に治療に通います。それなのに、Ｇちゃんは、昼になったからといって食事をしてもいいのだろうか。時間的感覚を通して、あなたの行為はいけないことだったとＧちゃんに伝えようということになりました。次の日、Ｈちゃんが病院に行く時、一緒についていくか、園で待っているかを選ばせました。するとＧちゃんは、病院についていく方を選びました。

病院はものすごく混んでいて、１時間くらい待ちます。病院から帰ってきてＧちゃんが言ったのは、「昨日もこんなに待ってたの？」でした。そして、医者がいいと言うまで毎日毎日病院についていきました。Ｇちゃんにとっては楽しい時間ではなく、苦痛な時間でしたが、そうさせようと決めたのです。病院は静かに過ごすところですから、ずっと静かに待っていなくてはなりません。Ｇちゃんは、病院から出ると、いつもため息をつき、“病院に行くのは大変なことなんだ”ということがわかったようです。

乳幼児期は、感性・感覚の時期です。言葉を重ねるより、行動に少し言葉を添えてあげた方が子ども

の体に意味がしみ込んでいきます。5 日間楽しくないお昼、1 時間待合室に並ぶ、あの時、「紙を持ってきて」と言葉で言えばよかったことの代償。行為の責任は取ってもらえばいいのです。

オ　突然の危険な行為や問題行動

これは、体で止めるしかありません。この子とこの子がくっつくとこうなる、というのがわかっている時は、保育者が間に入ります。

ある時、4 歳児の I ちゃんが人を求め、近づいて押すことがありました。「おはよう」と言った途端、3 人の女の子を「バン、バン、バン」と押すわけです。女の子はひっくり返ります。親からも話があり、少人数のクラスでしたが、もう一人保育者を入れました。倒れそうな所には芝生を敷き、保育者が子どもの間に入ることで、保護者には納得してもらいました。人に関心を持つのは 0 歳からですが、I ちゃんは 4 歳でやっと人に関心を持ち始めたのです。落ち着くまでに 3 か月くらいかかりました。

I ちゃんは卒園する時、「ぼくはお口で言う。学校に行っても我慢してぼくは言う。」と言いました。「だめ、やめなさい」ではなく「気持ちは大事ですが、言葉で言いなさい」と支えていくことが大切です。特に障害があり、言語性が高い子たちには、それはとても必要なことです。行動をとめるのではなく、心を大事にして適切な表現を伝えていくのです。

不適切な行為や問題行動の時こそ、その子なりの思いや考えを学ぶチャンスと考えると、保育のスキルは上がります。

カ　保育者の言動

危険を回避しようと「何やっているのー」と叫ぶことがあります。しかし、こういう声は子どもの心には届きません。日常で話す普通の声が一番子どもの心に届きます。子どもがわめくほど、保育者は波を普通にしたいです。子どもの心が嵐になり、怒りがある時、「なにやっているのー、だめでしょ」と言っては、この波は収まりません。どの園でも、毎日のように大泣きする子どもがいると思いますが、プロ集団として、穏やかに接することで雰囲気を和らげ、安心感を創り出していくのです。

発達障害の場合、二カ所以上で同じことが起きています。つまり、保育者が困っていることは、家庭でも困っているということです。保護者は、必ず悩んでいます。だから保護者が子どものことで相談に来た時、私が最初に言うのは、「よくここまで頑張って育ててきたね。私たちは子育てのパートナーだから、悩んだり困ったりした時、一緒に話をすれば悩みは二分の一、嬉しかったことは二倍になるよ。子育てのパートナーとしてよろしくね」です。

３　事例「勝ち」や「一番」にこだわる（４歳児）
『「気になる子」と言わない保育』より

「行動」のみに目を向け、「わからせる」ために強い口調で叱責するのでは、子どもの心に届きません。叱られたからやめるのであって、やってはいけないと考えて行動する力にはなりません。やりたかったことがやれないことは、子どもにとって、とても悲しく悔しいことです。その気持ちをわかってくれる大人が傍にいてくれたら、子どもは、時間がかかっても必ず折り合いをつけていきます。

わかってくれる大好きな人の言葉や行動で、子どもは少しずつ我慢する力を育てていきます。5 歳児くらいになると、保育者だけではなく仲間が入ってきます。「〇〇ちゃん、やりたかったんだよね。でもできなかったから、悔しいんだよね」と子どもが言えます。4 歳児、5 歳児になると、保育者がやってきたように子どもは育ちます。

「勝ち」や「一番」にこだわるのは、友達関係の中で起こる姿です。その子の周りの子どもたちに「いやなことはいやと言える力」「おかしいことは、おかしいと言える力」が育っていることが大切です。